

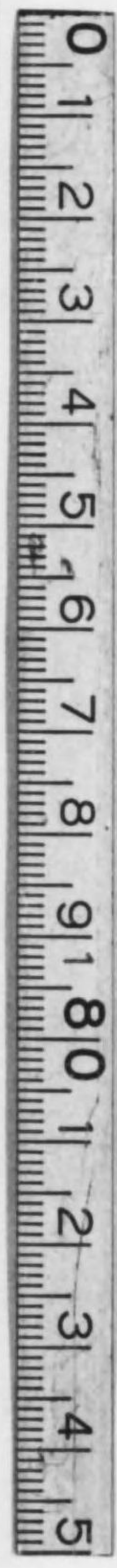
特 252  
104

皇 國 々 體 原 理

鹿 子 木 員 信

新 更 會

3  
6



始





特252  
104



皇國  
々體原理

九州帝國大學教授文學博士

鹿子木貞信







皇國々體原理



# 皇國々體原理

九州帝國大學教授文學博士 鹿子木員信

講演に入るに先立ちまして一言お詫を申し上げます。豫ねく新更會御主幹の方から本講演の要旨を書き送るよ  
うにといふ思召でございましたところ恰度先月の半から支那の山東省の方に参つて居りましたために御希望に副  
ひ得なかつたのであります。私は暫く青島に居り、更に奥深く膠濟鐵道の支線終點になつて居ります博山の岩嶺、  
事實上我が日本の經營になつて居ります、博山炭礦を訪ひ親しく之を見學致しまして、轉じて濟南に移りました。  
濟南に於ては山東省有数の學者梁漱溟と會見致し、また山東省首席韓復榘と會見卒直に時局に關する私見を開陳  
したのであります。それは恰度先月の二十七日、即ち天津軍司令官より翼察政權首席宋哲元に對して最後通牒を  
送つたその日限であります。恰度その日の午後私は韓首席と話をして居つたのであります。その晩私は濟南を立  
ち、韓首席の紹介を得まして、翌二十八日孔子の故郷であり、又墳墓の地であり、同時に今日に至る迄支那に於  
ける唯一の萬世一系の家とも言ふべき孔子後裔の住宅のある曲阜を訪ねまして、孔子七十七世の孫孔德成と言は  
れます本年十八の實に素晴らしい青年にお目に掛かつたのであります。次いでその翌二十九日孟子などもその中に  
泰山を挟んで北海を超ゆといふて居ります、あの泰山に登つたのであります。それが恰度二十九日、即ちあの悲  
慘なる通州事件を見、又北京郊外南苑の戰鬪最も激烈を極めつゝあつた當日であります。泰山は山東の平野より

皇國々體原理



屹立すること五千數百尺、信州の上高地から穂高の頂上に至る位の高さであります。登りに約五時間、下りに約三時間許りを費やす行程であります。この泰山の頂上に登り、遙かに北支を望んで、その調伏の一日も速かならんことを祈つた譯であります。その夜汽車にて済南に歸着して見ますと、事態益々緊迫を加へ済南の總領事は、済南在住日本人婦女子の引揚を命じられたといふことを承知したんであります。その夜私は済南を出發しまして、青島に歸りました。青島に歸つて見ますと済南の總領事は矢繼早に済南在住邦人全部の引揚を命令したといふことを耳にしたのであります。私は三十一日青島を出發し、一昨日東京に歸つて來たのであります。そつといふ次第で遂に講演要項を期日迄に差上げることが出来なかつたのであります。怠慢の責は全く私にあるのであります。儲かお手許に差上げてありますものは昨晚當地に着きまして差上げました私の手控でありまして、それを一晩中に、一方ならぬ御努力に依つて印刷なさつて出来上つたものなのであります。厚く係りの方にお禮申す次第であります。

本日私は皇國々體の原理に付て所懐の一端を申上げまして皆様の御参考に供したいと思ひます。皇國々體原理が如何なるものであるかといふことは、今日の世界——その亞細亞たるとその歐羅巴たるを問はず——今日の世界に對して、皇國々體原理が如何に重要な意味を有つて居るかといふことを指摘することに依りて一層その明瞭を加へるものと存するのであります。今日の講演に於ては私は時間の凡そ半分近くをこの點に費やして見たと思ひます。先づ皆様にお分りを願はなければなりません。私共の當面する事實若くは事態と私共の心構へ若くは思想信念との關係であります。その細かな關係を詳細に検討してお話申上げます暇は今日ないのであ

りますから簡潔にその大綱のみ申上げまして漸次本論には入つて行かうと思ひます。一定の社會狀態若くは一般に事態と云ふものは、自ら一定の心構を生んで來るのであります。換言致しますれば私共が或一定の環境の下に投出された時に私共のそれに對する心構へ、その時有つに至る思想といふものは凡そ定まつて居るのであります。ところが一度私共が一定の心構へを有つに至りますと、今度はその心構に依りまして新しき事態が生まれて來るのであります。即ち事態と思想との關係は常に相互關係にあると言つてよいのであります。申迄もなく近世の世界は約三百數十年の久しき、自由主義的心構に依つて指導され來つたのであるのです。それならばこの近世の自由主義といふ心構はどういふ事態に應じて生れて來たものであるかといふことを検討して見ますと、先づ近世的といふ點から申しますと、吾々日本人は西洋人に較べて幾分晩生の子なんです。西洋の方が一日の長であるのです。そこで西洋に付て自由主義の生れます状態を見てみやうと思ひます。近世西洋の自由主義は所謂ルネッサンスを以つて初めて擡頭して來るのです。それならばこのルネッサンスは、どういふ社會事態に芽生へて居るのであるか。ルネッサンスに先立つ時代は申迄もなく中世の世界であります。西洋中世を主宰して居りました社會的力は日本中世に於ける支配勢力と極めて似て居り、城の武士、寺の僧侶がそれであつた。御承知の通り信長出現前後に於ける日本に於ても、社會の支配勢力は各地の大小名、即ち城に據る武士と本願寺高野山、比叡山等の寺に據つて居た僧侶であつた。西洋に於ても極めて相似たるものがありました。西洋中世の社會は武士階級と僧侶階級との支配するところであつた。而してこれ等の階級は所謂群雄割據の勢ひをなして居りました。而して此等の力は同輩交戦を事とするがため中世の時代は纏て國內戰爭の時代であつた。而も時と共にこの中世社會組



織が漸次固定して参りますと、自ら平和の打續く日がつゞくのであります。平和の日が續きますと自ら人々は多くの欲求の満足を冀ふに至るのであります。多くの欲求満足の資料として様々の品物を必要とするに至るのです。従つて工藝美術品やその他様々の贅澤品を作る人達が生じて参ります。即ち工人といふものが生じて参ります。而して工人は工人としての存在と確保致します爲にはその生産を成るべく多くしなければならぬ。而してその多くの生産品はこれを廣く賣捌くことが出来なければならぬ。工人は自ら物を作りつゝありますから、その生産品を自ら賣捌くことは出来ない。そこで商人といふものが茲に生れて來るのであります。而して工人と商人とは何れも經濟的生產配給關係と云ふ一連の經濟行爲の一部を分擔し、不可分の關係にありますから、自ら彼等と同じ地域に軒を並べてその住居を構へるに至る。中世の世界に於きまして工人や、商人の御得意先は城の武士と寺の僧侶であります。さういふ處から城のまわりは城下町が出来る。大なる寺を圍つて寺町が出来て参ります。即ち茲に町といふものが出来て來るのであります。而して平和が續けば續く程この町の人口は殖え、その生産力は多くなり、その富は漸次多きを加へて來、或時機に到達致しますと、當初お城と寺に依存せる町が城と寺を凌ぐ力を有つて参ります。さうして遂ひには町自らが城塞を構へ、自分の軍隊を養つて城の侍寺の僧侶に拮抗して戰爭を行ふ所迄進展して参るのであります、私共は今日尙ほ歐羅巴の各所に、例へば獨逸や佛蘭西や伊太利の所々に城と寺に拮抗して商人の作りました要塞の形をなして居る中世紀の美事な町を見ることが出来るのであります。ところが地域を同じくし、言葉と同じくし歴史傳統を同じくする僧侶と寺と町のこの三者が互ひに相争ふといふことは百害あつて一利ないといふことが漸次明かになつて参ります。茲に於てこの城と寺と町の三

者が相集つて一つの利害の協定を結びます。斯くして起り來るものが近世西洋國家であります。斯くして西洋に近世といふものが生れて來るのであります。斯ういふ關係から近世の推進力は城の武士でもなく、寺の僧侶でもなく、寧ろ町の町人であつた、ところが町人に取りましてなにか一番大事であるか、町人の據つて立つて居ります存在の基礎は富であり、金である、城の武士の存在の基礎は劍であり、武力、寺の僧侶の存在基礎はなんであるかといふと教權であり、教である。それに對して繰返して申しますが、町人の存在とその權力はなにの上に築かれて居るかと申しますと、富の上に築かれて居る、ところがその富は何處から出て來るのであるかといふと、言ふ迄もなく經濟的生產と經濟的配給といふものから生れて來て居る。然るに經濟的生產と配給とはどういふ條件の下に初めて盛んであるかと申しますれば、人の物欲の心が開放されて、自由にその欲するところを充たさうとする心構があることが先決の條件である。若し人の心が無欲を尊び寡欲を重んずるといふのでありますならば、如何に工人が人の欲しさうな品物を作りましても、又如何に商人が之を擔ふて諸所にあきなひをしましても、人々はこれに手を出さないので。町人は結局賣の持腐れをして倒れるより外に道がない。町人が益々盛んになつて参ります爲には、人の心が物欲しき心を以て充たされ、而してその物欲を自由に充たすことが好い事であると云ふ心構がなければならぬ。即ち物欲満足の自由といふことがありまして、初めて町といふものは榮えて行く。換言致しますれば近世の推進力たる町が依つて以つて存在して行くのは實に自由精神です。さういふところから當時何れも獨立の町としてその存在を保ち、その富と權力とを蓄積しつゝありました伊太利の多くの自由都市の間に、ルネッサンスの運動は捲き起されて來るのであります。以上のやうな近世の事象から自由主義の心構



が生れ來つたのであります。

次に自由主義の本質は如何なるものであるかといふことを簡潔にお話し申上げようと思ひます。自由主義と申しますのは「自らに由る」主義と書いてありますように自らを主とし、自らを本とするところの心構、心懸であります。その自らといふのはなんの自らを指して居るのであるか、民族としての自らを指して居るのであるか、國家としての自らを意味して居るのであるか、若くは所謂大我としての自らを指して居るのかといふと無論さうでないのであります。銘々の經驗的のこの私、銘々の己を自らとし、その自らを旨とし、この私に據つて行動して行かうといふのが自由主義であります。なにごとくに依らず、自分に據る、私に據るといふことは、自分は恰も神の如くである、我れは神の如くにこの天地の間に處して行くのである。なに事に依らず、自分自身が行動の原理である、なにものにも牽制されない、なにものにも拘束されない、思ふ存分行動するのであるといふのが所謂自由主義の眞面目であります。然るに事實私共はなに事かを行はふとすれば直ぐ掣肘を受ける、天空高く飛ばんとすれば引力の力に依つて引き下される、早くその慾する處に走らんとしても、残念ながら私共の歩みは牛歩の遅々たるものがある、斯くしてなんの自由ぞや、こゝに於て本當に自由に生活し行動し得る爲にはどうしてもこの自然を征服し支配して行かなければならないのである。然るに自然を征服する爲には自然を構成して居ります自然の本質を極め、また自然の法則を明かにしなければならぬ。斯の如き理由の下に近世初當ルネッサンスの運動と共に人々は自ら自然の研究にその眼を向けて行つたのである。中世西洋の精神は絶對なる神にその思ひを致して居つたのです。然るに近世自由主義の誕生と共にその眼は神よりこの自然外界に轉じ、神の攝理を極

めることから自然の道理を明かにすることに移り變つて行つたのであります。斯くして近世西洋諸國の精密廣汎な自然科学は生れて來る。而して自然科学に依りて自然の本質とこれを動かすつゝある理法を明かにするは總て自然そのものをその欲するまゝに動かす道具、即ち機械技術を作り出す所以である。斯くして近世の驚くべき機械技術が近世自然科学の上に打ち立てられるのである。而して、又この近世機械技術に依り驚くべき經濟的生産の飛躍發展を成就することが出來たのです。元々道具は僅かの力を以つて最大の効果を擧げることその目的とするのであります。然るに今や深く自然の理法を極めその理法に基いて、道具を作り出したのでありますから、その機械技術は實に從來一人の人が一日掛つて十の物を作り出したとしたならば、一人の力を以て一日百千のものを作り出すことができ、茲に所謂産業革命が行はれ、それと共に異常なる富の蓄積が始まり、遂に新しい經濟組織としての資本主義が確立されるに至るのであります。而してこの異常なる資本の蓄積に依りて自然の征服は一日は一日とその歩みを進め、今日に於ては既に地球の引力に打勝つて自由自在に鳥にも優つて、大空を駆け廻ることが出來、又魚よりも巧みに、魚よりも深く海の底を潜ることが出來、又なによりも早くこの地上を走ることが出來る、今日地球は實に狭い小さな一つの球と化せられて了つたのであります。斯の如きは之實に近世自由主義の賜と言はなければならぬのであります。然るにこの自由主義的世界人生觀が以上の行程を完ふせんとするに従ひ漸次その餘弊が暴露し來つたのであります。若し自由主義が人の生命の中心に即して居るものでありますならば、自由主義は永遠に人の履むべき道として、その弊を暴露することはないのでございます。然るに深く思ひを自由主義の本質に潜めする時に私共はそこに非常なる缺陷を發見せざるを得ないのであります。と



申しますのは義にも申上げましたように、自由主義は自らを主として行動し、生活すると云ふことを建前として居るのであります。所で吾々は果して自らに由るものであらうか。深く考へて見ますに、私共は決して自らに依つてあるを得て居るのではない。自らに依つて生きつゝあるのではないのであります。私共は言ふ迄もなく親から生れ来たつて居る。親に依つて育てられて居る、先輩先生の教へ、導きに依つて初めて今日あるを得つゝある。私共の存在と、その存続とを深く検討して見ますと、殆んど十中九分九厘迄はこれを他に依つて居るのである。この故に佛教に於きましても四恩を説いて居るのであります。即ち私共の眞面目は自由に存せず、寧ろ他由にあるのであります。この人生の眞面目を逸し、吾々人間が恰も神の如く自らに由るものとして思考し、行動する時、何時かは破局に當面するに至るべきは理の必然と言はなければならぬ。而してこの近世自由主義の第一の破局は私共これを世界大戦に見ることが出来るのであります。元々西洋の社會なるものは、絶へず戦争の歴史を以つて彩られては居りますが、從來の戦争は、統一ある歐羅巴社會内部に於ける出来事として戦争はれたものである。然るに過ぐる世界大戦は此の一つに纏まれる西洋の社會を、再びこれを拾收し得ない程度に迄、深き溝を以つて分裂せしめて了つたのである。換言すれば西洋の近世自由主義は先づ近世西洋の國際社會を數多くの敵味方の陣營に分裂せしめたのであります。更に進み近世自由主義の末路とも言ふべきマルクス共產主義は歐羅巴の國際的闘争に加ふるに、上下の階級相對立する階級闘争に迄劇化せしめたのであります。而して最後に最近の露西亞及びスペインの例がこれを例示して居りますように、民族の對立、階級の闘争に加ふるに個人相互の反目嫉視闘争を誘致して居るのであります。かくの如くして自由主義の極まる所、人類社會は崩壊するに至り、

かくて曾てホツプスが國家成立以前の人類の状態として描ける總ての人の總ての人に對する闘争は必然の有様とをるのであります。而して事致に至りては残るところ、も早人間の社會に非ずして寧ろ鬼畜の社會であります。この近世自由主義の末流として我等は今日二つの潮流の存するを指摘することが出来るのであります。一つはロシアには入つてロシアにソヴィエツト國家を建設致しましたところのマルクス共產主義であり、第二は孫文に依つて提唱されました所謂三民主義であります。この自由主義の二つの末路が歐羅巴及び亞細亞に於て如何なる役割を演じつゝあるかといふことを簡單にお話して見やうと思ひます。過ぐる世界大戦以來歐羅巴の社會が崩壊の一路を辿りつゝあるといふことは、今更事新しく指摘する迄もないと思ふのであります。即ちアングロサクソンの自由主義から直接民主主義的自由主義を経てソヴィエツトロシアのマルクス共產主義の自由主義に至ります迄、その間緩急の違ひこそございますけれども、何れもその傾向は崩壊の傾向である。その具體的の實例を私共は最近のスペイン動亂に見ることが出来るのであります。ところが若し歐羅巴に於て何等新しい再建の試みといふものがないのでありますれば歐羅巴は遠からず曾てスベングラーが豫言して居りますやうに、没落の運命を免るゝことは出来なかつたと思ふのでございます。然るに私共は歐羅巴再建運動が力強く持ち起されつゝあるのを看過することは出来ない。その一つはイタリアのファツシズムの運動でございます。イタリアのファツシズムの運動なるものはこれをその起源に付て尋ねますれば、依然として一種の自由主義の末路であつた、即ちムツソリーニが初めてファツシズムの旗色を翻してイタリア革命を畫て、これを成就致しました當時ムツソリーニ及びその同志の人々は何れも彼等の爲し遂げたイタリアの革命をサンジカリズムの革命であると言つて居つたのであ



ります。即ち彼等の信條とするところはサンジカリズムであつた、組合主義であつた。組合主義は、本来自由主義の殘滓に過ぎない、ところが彼等がサンジカリズムを信條としてイタリア革命を成就して政權を把握し、イタリアの再建を畫てる道すがら彼等の認識は漸次深まつて行つたのであります。即ち彼等は當初の組合主義國家から團體主義的國家といふ理想に變り、更に團體主義的國家より全體主義的國家に變つて來つゝあるのであります。即ち革命の當初に於きましては彼等の思想は尙ほ自由主義の殘滓を持つてゐたのであります。革命完成の道すがら彼等の思想は一步は一步深くなりまして、何時とは知らず全體主義的な立場に迄飛躍發展をなして居るのでございます。而かも尙ほイタリアのアスチスミスは一つの理論構成たるを免れないのであります、依然一つの思想的構成であり、一つの理論である、その理論に依つてイタリア國民生活を型取つて行かうといふ努力の跡が見えるのであります。ところがこれに對しまして獨逸のナチス所謂民族社會主義に至りましては全然土地と血の叫びである、理論に非らず寧ろ現實そのものゝ叫と言つてよいのであります。この點がマルクス主義といふが如きものに較べましては全然その面目を異にする所であります。マルクス主義なるものはユダヤ精神の爲にする或一つの理論構成に過ぎない。何等の事實そのものゝ叫ではないのであります。これに對して獨逸民族社會主義なるものは元々理論でない。寧ろ二千數百年の歴史的傳統を持つところの極めて優れて居るゲルマン民族の没落の淵に飄落し、如何にして没落の淵より更生の道に甦りを望むことが出来るかといふ最後の殆んど斷末魔の究局の叫び聲であります。従つて獨乙ナチスの旨とするところはその言葉通り民族主義であります。これが獨逸の民族社會主義とイタリアのフアスチスミスと我輩と異なるところであります。イタリアのフアスチスミスに於ては

その主たるところのものは常に國家權力です。この國家權力を以つてイタリア國民を訓練して行くのです。イタリア國民は國家權力の訓練の目的物です。然るに獨逸の民族社會主義に於てはその旨とするところのものは、民族です、國家はこの民族に仕ふるところの一つの道具に過ぎない、一つの機關に過ぎない。國家は機關なんです。その尊ぶところは常に民族である。民族の永遠の繁榮といふことが眼目の存するところである、國家權力は民族の繁榮を目的とする一つの手段であるといふことをヒットラーは繰返し々々十年一日の如く説いて居るのであります。國家すらも民族繁榮の手段たるべきものであるといふのでありますから、各個人はその存在の意義と、その存在の幸とを、この民族といふ全體に貢獻するところに見出して行くのである。獨逸民族社會主義の精神は言葉通りに一分一厘の駈引なき奉公の精神です。ヒットラーはこの見地に立ちて民族の優越といふことを説いて居るのであります。如何なる民族がこれ優れたる民族であるか、民族の優越は、その智能の優越や手腕力量の優越に存するのではない。寧ろその民族の滅私奉公の精神の多少に存する。滅私奉公の精神の徹底せる民族が世界に於ける最も優秀な民族である。それに反して、どんなに頭がよく、腕が出来て居つても利己を以つて旨とするが如き個人を多く有つて居る民族は劣等民族なのである、これに依りまして獨逸の民族社會主義といふものがどういふものであるかといふことが略々お分りになるだらうと思ふ、從來社會主義といふ言葉は自由主義の徹底せるものとして使はれて居つたのであります。例へば社會主義の中で最も科學的であると言はれて居ますマルクス主義を取つて見ましてもマルクス共產主義の目標とするところはなんであるか、彼等口を開いて吾々に説くところを聞きますと、それは常に自由なんです。なんの自由であるか。言ふ迄もなく銘々の自由だ、私共一人



一人の自由なんです。それならば資本主義的自由主義となんの異なるところがあるか。異なるところは資本主義の下に於ては自由を享受するものは少数の金持に限られて居る。共產主義若くは社會主義の下に於ては多くの人が、理想的には總ての人が、自由を享受することが出来るのだ、この言葉に依つて見ましても資本主義と、社會主義、若くは共產主義と本質的には何等異なるところはない、その目標とする所は個人の自由です。唯共產主義若くは社會主義に於ては自由を享受する個人が量的に擴大するといふのでありますから、私は社會主義乃至は共產主義は要するに自由主義の普及版であると言ふてをります。在來の社會主義及共產主義は要するに自由主義の普及版に過ぎない。その重んずるところは依然として個人の自由である。個人銘々勝手次第なことをなすことが出来るような社會にしようといふのです。然るに曩に申しましたやうに、私共は元々勝手次第なことをするようには出來て居ないので、勝手次第なことの出來ないやうに出來て居る。私共が勝手次第のことをするといふことは勿論人間たる所以に居ることでありませう。かくて自由主義の到達するところは禽獸鬼畜の境涯です。然るに今日の西洋に於きまして獨逸の民族社會主義は明かに自由主義を否認して居ります。人間は元來その民族社會の中に一定の處を得て生まれて來、その民族の中に初めてその存在を得、その幸ひを得つゝある。従つてその屬する民族全體の爲に盡すといふことがその面目であり、幸ひであるといふことを教へて居るのであります。獨逸の民族社會主義は從來の社會主義が本質的には個人主義であるのに對して額面通り社會主義です。個人は飽く迄社會の爲めにあるものであるといふことを徹底して説いて居るのであります。然らば獨逸の民族社會主義は如何なる政治社會組織原理を以つて斯くの如き民族の繁榮を企圖せんとして居るのであるかと申しますと、ヒツトラ

1の所謂指導者原理を有つてして居るのであります。

御承知の通り自由主義的社會國家に於てはものを決するに多數決の原理に據つて居るのであります。國運の大事を決する議會協賛の決議より町會村會等の決議に至ります迄、若くは經濟界に於ける株主總會より、大學の教授會の決議に至る迄、多數決の原理に依つて、ことを決し、ことを運びつゝある。然るにこの多數決の原理といふものが正しき方法である爲には一つの前提が確立して居らなければならぬ。それはどういふ前提であるかと言ひますと、決議に参加する人々が、若くは投票函に臨む所謂有権者が、悉くその識見、その力量その判断に於て平等であると云ふ事です。若しその間に賢愚不肖の別があり、正邪善惡の差別があるといふのであります。ならば、多數決の原理といふものは一文の値打なきものである、全然その據つて立つ理論的根據がないのである。然るに事實見るところ多數決原理に参加する人々は、その識見判断に於て決して平等でないであります。教授會の如きは一定の學力標準を抜いて居る人々であるのでありますから、その識見判断に於て最も平等の理想に近いと見ることが出来るのであります。私の經驗に依つて見ますと、大學教授會の場合のやうに決議に参加の人々が比較的平等である場合に於ても、その決議には幾多の間違がある。而して間違つたことを決議した時に、誰が責任を負ふか、一人として責任を負ふ者がないのであります。少數の人々は言ふ、吾々は斯ういふ面白からぬ結果を見ると思つたからこそ反對意見を述べたのである。然るに君達が多數を以て吾々と反對のことを議決した爲め斯んなことになつたのだ、と云つて少數の人々は多數者を責める。多數者は言ふのにいや貴君方の反對意見は十分でなかつた。何故もつと詳しく適切に反對の理由を述べなかつたのであるか、貴君方の反對の仕方が悪いから



吾々は多數を以て斯ういふ風に決定したので罪は諸君にあると斯ういふことを言ふのであります。悪いことをして置いて誰一人責任を負ふ者が無い。斯ういふような仕組でどうして國運が發展して行くことができません。多數決の原理といふものは世の中が頗る泰平であり、國際情勢も亦頗る泰平であり、少々の誤算過失位は何等國運を傷付けるやうなことはない。少々の誤算は却つて時に取つての刺戟であるといふような餘裕のある泰平の世界に於ては一場の遊戯としてこれを看過することが出来る。英吉利がその盛時この多數決原理を採用致しましたのは故ありと言はなければならぬ、英吉利の國運は隆々たるものがあり、その世界に於ける覇者の地位には一寸の動きなきが如き時には、英吉利が多數決の原理を以てその國政を執り行つたといふことにもそれ相當の理由があるのであります。然るに大戦後の獨逸に於けるが如く没落の淵に臨んで、一步を誤れば永遠の破滅の底に沈淪するといふが如き状況にありましては、ヒットラーの思想は確かに故ありと言はなければならぬのであります。ヒットラーは正直に人間の間には賢愚不肖の別があり、正邪善惡の違がある。正しい強い優れた人が多くの人の指導者に立ち、多くの人は優れた人の指導の下に行動するといふことはこれは當然なことである。然らざれば國全體を擧げて漸次衰亡に向ふのは、必然です。この認識の上にヒットラーは獨り彼の率ゐる民族社會黨内部のこのみならず政權を取りました後に於きましては國家萬端のことを多數決の原理に據らず、所謂指導者の原理に據つて居るのであります。即ちヒットラーはその同志の内でも優れたりと認める人を任命して、これに最も重要な國務を分擔せしめる。而してヒットラーに指名されたる人々はヒットラーに對して絶對の服従を誓ふと共に他面又有能の人を擧げてこれに自分の分掌する國務の各部分を分擔せしめ、その部下に對しては絶對の權威を有つて居るのであります。斯して軍隊の制度を以て申しますれば一等兵、二等兵に迄及ぶのである。斯の如く上に對して絶對の責任、部下に對しては絶對の權威この原理を以つて上は、今日ヒットラーの占めて居ります全獨逸指導者の地位より、下は一等兵、二等兵の末に至ります迄、而も獨り軍隊のみならず、官廳のみならず、或は學界、經濟界、實業界、工業界に至ります迄この組織を以つて全獨逸を組織して居るのであります。この組織に依りますると人は各々その高下の地位こそ異なれ一面常に指導されるものであると共に、他面常に指導者である。例へば小隊長は中隊長の指揮を受けて絶對にこれに服従するものであると共にその部下の者に對しては絶對の權威を有つて居る。目上の人に對して絶對の服従を、目下の者に對して絶對の權威を有つといふことは取りも直さず絶對の責任を負ふて居るといふことなのである。絶對の責任を負ふ所に私共は全身全靈を有つてことに當らざるを得ないのであります。然るに曩にも一言致しましたやうに、人は各々一面指導されるところのものであると共に他面指導する者である、如に耕やす農夫、工場に働らく一労働者と雖も家に歸れば一家の主であり、一家の主人としてその家族の者に對して權威を有つて居る。戸主として父としての權威を有つて矢張り家族の全運命を自分の掌に握つて居るのであります。又八つの子の女も父と母とその姉と兄とに對しては服従の立場にありまするが、六つの弟に對しては指導する立場に居る、常に誤なからんことを期せねばならぬ、而もその責任たるや實に絶對言ひ逃れがない。斯ういふ譯でありますから手取早く申しますると、殆んど獨逸全國民一面指導者として絶對の責任を負ひ、従つて寸分の緩みなき緊張せる生活を送りつゝあると見ることが出来るのであります。さなきだに優れたる獨逸民族であります。この優れたる獨逸民族が今日、各員その全身全力を發揮せざれば

皇國の體原理



己まざる組織を有つて獨逸六千萬の民族國家を建設しつゝあるのです。これ實にヒットラーの率ゐる獨逸民族社會黨が僅か數年の間に獨逸史始まつて以來二千數百年、獨逸民族殆んど二千年の憧の夢でありました。獨逸民族の統一を實現し、更に他面世界大戰疲弊の跡を承けて、將に永遠に没落の淵に沈淪し去んとする境涯より逸脱して、今日世界に濶歩勇躍せんとする大勢を示しつゝある所以であり。それと同時にこの獨逸の民族社會主義運動なるものは人間本來の面目に即せる心構であります。人間本來の面目は曩に申しました通り徹頭徹尾他由なのです。私共は親の育に依つて初めて活き永らへ、又先生の導に依つて初めて人並の心懸が出来て、斯して銘々人間たることを得て居るのです。その幼年の時に當りましては親の僅か十數時間の懈怠が直ぐ様赤子の生命を絶つて了ふ。父であり、母である皆様は直ぐお分りのことと思ひますが、十時間幼者を顧みなければ、幼者は活きることが出来ない。親の不斷の哺育、愛護といふことがあつて初めて私共銘々は生ひ立つたのです。さうして親は無論又その親の子であり給ふた。それと同時に横に又私共の親としてあり得給ひしは實に我が國家のありたればこそです。斯の如く私共の存在といふものは殆んど徹頭徹尾他にこれを仰いで居る。即ち私共の屬する民族永遠の古より永遠の將來に向つて彌榮に榮えつゝある。この民族に由りてあるを得て居る。それ故に私共の活きて行く意義と、従つてその幸とは私共が民族に仕ふるところにある。これが即ち人間の本來の面目であります。この本來の面目を飽く迄培つて行く、この本來の面目を受用するといふところに人間の榮があるのであります。獨逸の民族社會主義はこの人間本來の面目に立脚せるものといふことが出来る。その故にその國內政治は申迄なく、その外交政策に於きましても獨逸の運動は歐羅巴再建の運動として現はれつゝあるのであります。自由主義

的迷夢より醒めない多くの日本の學者及思想家達は、自由主義晩生の子、即ち流行遅れの自由主義者であるが爲め、今日尙ほ自由主義といふものが恰も世界進歩の代表者であるかの如き誤想に陥り、従つて自由主義の末路であるところの或はマルクス主義或は三民主義といふものが進歩的思想でもあるが如き迷夢に陥つて、その立場からそれと全然趣を異にしてゐる獨逸民族社會主義を恰も反動思想であり、武斷獨裁の政治であるかの如く思ひ誤まり、獨逸の行動を恰も爆彈を胸に抱けるものゝ行動であるかの如く批評して居るものがあるのであります。見當違ひも甚だしいと言はなければならぬ。獨逸に依つて初めて今日の歐羅巴は漸次積極的に建設されつゝあるのです。今日英吉利と伊太利が最後の破局に爆進せず、寧ろ昨今の形勢に於ては一定の諒解に到着し、平和の内に共々歐羅巴再建の事業に携はらうといふ氣運を示して居る所以は、獨逸の力に依るのであります。

次に近世西洋の自由主義は、近世西洋の崇拜者でありました支那の孫文に依りまして三民主義といふ形態に依つて支那四億の民に普及せしめらるゝに至つたのであります。御承知の通り今日支那の中央政權を掌握して居りますものは中國國民黨と呼ばるゝ政黨であります。今日の支那を分り易く譬を以つて申しますと、支那は之を非常に廣汎にして深厚な土臺の上に建設されて居る木造ペンキ塗の所謂「文化」住宅にも較べることが出来るのであります。廣汎深厚な土臺とは申迄もなく支那の民であります。この廣汎深厚な土臺の上に建てられて居りまする、木造ペンキ塗の所謂「文化」住宅は、國民黨に依つて建て支られて居る那の政治機構國家機構であります。而してこの木造ペンキ塗の文化住宅は、尙ほ之を詳しく見ますと、二階建になつて居る、その二階の方は今日の支那の指導者であります蔣介石その他の所謂國民黨の指導者が住んで居るのであります。又その一階の方



に住んで居るのは、所謂少壯中堅の國民黨員であります。さてこの民といふ基礎の上に出来上つて居ります木造安建築の骨組はなんであるかと申しますと、それは所謂孫文の提唱致しました三民主義です。三民主義と申しますのは先づ第一に民族主義第二に民権主義、第三に民生主義何れも民といふ字を以て始まつて居りますところから孫文はこれを名付くるに三民主義と言つたのであります。それならば民族主義といふのはどういふのであるか、孫文説明して申しますには、支那は元來家族を重んずる國であつた。家族宗族の爲には各人その身を犠牲にするを辭せない。然るにその犠牲の對象たるところのものは家族宗族に留まつて民族若くは國族に及ばない。然るに方今世界の列強は何れも民族を以て主義として居る、民族の爲に一身一家を犠牲に供しつゝある、民族を以つて團結して居る。吾々は僅かに家族せいゝ宗族を以て居るばかりだ。それ故に吾々の力は彼に及ばず、遂に國際競争場裡に落伍者たる運命を得つゝあるのである。斯して吾々が國際的地位の平等即ち世界列強の間に平等の地位を獲得し得る爲には、從來の家族主義若くは宗族主義を超越した民族主義を實行しなければならぬと、斯う言つて居るのであります。即ち民族主義の目標とするところは國際的地位の平等といふことなんです。次に民権主義と申しますのは日本では普通民主主義と譯して居ります所謂デモクラシーであります。これは明かに英吉利就中亞米利加の民権主義を模倣せるものでありまして、その目標とするところは國內に於ける各個人の政治地位の平等といふことであります。即ち各個人が政治的には同等のものとして取扱はれることを要求する。といふ義の所謂個人自由主義の政治的表現が即ちデモクラシー民権主義と稱するところの徹底的に間違つた考へ方でありませぬ。次に民生主義の目標とするところはなんであるかと言へば、國內に於ける各個人銘々の經濟的平等であります。

す。從來の經濟組織に於きましては一國の間に甚だしき貧富の懸隔がある。それは甚だ面白くない。經濟的に銘々平等でなければならぬと云ふのです。民生主義と申して居りますところのものは實はマルクス共産主義の總直しです。無論孫文はマルクス主義をその儘奉ずるとは言つて居りませぬ。マルクス主義を種々な點に於て批評して居りますが、その根本の思想である經濟的平等といふ思想はこれはマルクス共産主義を受入れたものであります。さういふ譯でありますからこの三民主義といふものは民族主義を他に致しましては民権主義も、民生主義も實は何れも糺に申しました自由主義の一つの變形に外ならないのであります。然るに民族主義なるものはこれを嚴密に申しますと、先刻獨逸の民族社會主義に付て申しましたように個人は民族の爲の個人なんです。民族があつて個人といふものがある。従つて個人の生命その行ひ、その總てのものは民族の爲なのである。然るに三民主義に於きましてはその二つは個人の政治の平等、個人の經濟の平等等飽く迄個人を目標として居る即ち故に先づ第一に孫文の三民主義が辻褄の合はない論理的矛盾を生ずる、その生半熟の思想であるといふことは誰の眼にも明かであります。更にこれをその思想の據つて起るところに付て質して見ますと孫文をして最も多く民族主義の必要を痛感せしめたものは、西洋近世の民族主義もさることでありませぬけれども、實は明治維新以來の日本の劃期的な異常なる勃興なんです。どうして日本があゝの幕末の脆弱なる状態から世界大戰に際しては世界の五大列強の一つといふが如き雄大なる地位に迄躍進することが出来たか。孫文はその最も重なる原因を日本國民の民族主義的精神に見て居るのであります。即ち日本の異常なる飛躍發展といふ目前の事實に刺戟されて、世界列強の間に伍して國際的平等の地位を獲得し得る爲めには支那も日本と同じように民族主義を奉持しなければならぬ。



らない。これに對して民權主義は、何處から孫文これを汲み來つたのであるか、これは孫文も言つてゐるやうに歐米からである。

然らば孫文は民生主義即ち經濟主義平等の思想を何處から汲んで來たか、これは申迄もなくロシアに於けるマルクス共產主義的革命的の成功に眩惑して之を言ひ出したのであります。かくして既に民權主義は拜歐米、毎日の感情を、民生主義は親露抗日の思想をその中に包蔵してゐるのであります。孫文生時に於ては尙ほ未だこの三民主義を携げて抗日敵日の武器とする所には至つて居らないのであります。然るにその後蔣介石一派の支那國民黨の指導者は、民族主義を支那國民の中に鼓吹する手段として、漸次三民主義中の毎日抗日思想を活用し、盛んに抗日排日を唱導し始めるのであります。換言致しますれば、支那の所謂民族主義は日本や又は今日の獨逸に唱へられて居るような崇高な意味と具體的内容を持つ民族主義でなく、その實質内容は抗日主義と成つて來たのであります。民族主義を説くものは抗日を説かなければならない、抗日が即ち民族主義を實行する所以であると。この信念が、或は小學校の教科書を通し、或は政治生活を通し、或は新聞雜誌を通し、或は各種の經濟的行動を通して支那四億民に浸潤して參るのであります。さういふところから先きの木造ペンキ塗二階建の文化住宅の譬について申上ますれば、此の家の近所との附合はどうかと云ひますと、東の方の日本といふ家があります。そつちへは常に弓や鐵砲を向けて備へて居る。然るに南隣の英吉利や、東の方一軒先きの亞米利加、それから北隣のロシアといふような家には、常に握手を求め又秋波を送つて居るといふような有様です。即ち絶えずこの歐米及ロシアと提携して日本に當らうといふ外交政策を執つて居るのであります。これが支那國民黨の黨是であります。

三民主義は此の點に於て亞細亞を崩壊に導く外交政策であるのです。既にこの點に於て私共は三民主義を奉ずる國民黨の亞細亞の天地に存在することを許し得ないのであります。更に一步を進めまして、曩に申しましたこの木造ペンキ塗の所謂文化住宅の二階には今迄先づ大體に於て國民黨の指導分子が住まつて威張つたのであります。昨年十二月の西安事件を契機と致しまして、今迄排斥して居りましたソヴェトロシアを祖國と見る共產黨といふものに段々その門戸を開いて來た。かくして最近に於ては、この建物の一階は國民黨と、共產黨との合宿と云ふ事になつて來た。この國民黨と共產黨との合宿は、之はコミンテルンの一つの戰術でありまして人民戰線の統一と言つて居るのであります。ところがこの共產黨が國民黨と合宿するに至つたのは元々腹に一物あつての事です。それは一つはソヴェトロシアのために國民黨と提携して支那をして全力を擧げて日本といふ家に双向はせこの日本といふ家を叩き潰すために力を出させやうといふ腹であります。さういふ意味から支那の共產黨は今迄殆んど不倶戴天の敵として茲數年闘つて參りました國民黨と合宿を始めたのです。けれどもこの共產黨には、もう一つの目的がある。それはどういふ目的であるかと申しますと、國民黨の少壯中堅分子と提携して徹底抗日主義を叫び遂ひにこの木造ペンキ塗の住宅を以て日本の金剛不壞のお宮にぶつつかつて行はゞこのペンキ塗の安普請は一溜もなく破れるであらうといふことは略ぼ分つてゐます。そこで一旦破れますとその責任者である二階住居の連中はすつ飛んで了はなければなりません。さうすると共產黨は元々その後ろにはソヴェトロシアといふ龐大な實力を控えて居りますから、自然自分が國民黨に取つて代り、支那大陸に共產主義を樹てやうと云ふのであります。この自由主義の末路で、遂に人を馳つて鬼畜の生活に入らしめなければ止まぬ共產主義を亞細亞の



天地に敷くことは亞細亞の崩壊でなくて何でせう。今日支那より日本に歸つて見ますと、東京の御方針は飽く迄も事件不擴大といふことを堅持して居られるように見受けられるのでありますが、支那の方では飽く迄も事件擴大主義を執つて居るのであります。斯の如き情勢の下に果してどの程度迄東京の事件不擴大主義、原地解決主義といふものが貫徹するか、私は頗る心許なく思はれます。寧ろ事態は飽く迄も擴大の傾向を執りつゝある。申迄もなく隣の家之二階住居の連中は日本のお宮の強さも略分つて居ります。又日本の人々と絶えず折衝する機会を有つて居りますから、容易にこのお宮といふものが揺ぐものでないといふことを知つて居るのであります。故に打つかつて行けばペンキ塗の住宅は直ぐ様すつ飛んで了ふこと位は知つて居りますから、此等の人々は不擴大を心の中には念願して居るかとも思ひます。ところがなんと致しまして今迄十數年の久しき間吾々は日本と闘ふのだ。抗日主義は即ち救國主義である。といふことを一階の連中にやかましく注ぎ込んで、それで家全體の堅めをこれ迄作つて来た。それを愈々日本とやるといふところになつて俺は恐くなつたから止めるといふてもう聞きさうにない。殊に共産黨が入つて居りますから到底その見込はない。さうすると二階住居の連中も結局一階の連中に引摺られて、この金匱無缺鐵壁のお宮に打つかつて来ると考へなければならぬ。私は今日これを斷言は致しませぬけれども、この可能性といふものは非常に強いのである。従つてこの可能性に對して東京の當局者は周到な準備を遊ばされる必要がある。この亞細亞の崩壊を招来するが如き緊國氣を有つて充ち満ちて居るこの本造ペンキ塗の文化住宅を一掃し、これを綺麗に焼いて了ふといふ用意が大事なであります。斯くして初めて支那四億の民は浮ばれるのであります。それならばこの三民主義といふ間違つた思想を有つて凡ゆる意味に

於て亞細亞の崩壊を企圖しつゝある國民政府を一掃した後で、何を以て支那の民を興すか。それに答ふるものは即ち我が皇國の原理に外ならない。先程私は崩壊に瀕せる歐羅巴再建の指導的勢力は民族社會主義であり、獨逸指導者國家であるといふことを申し上げたのであります。亞細亞復興の原理は實に皇國の原理であります。此の見地より今日亞細亞大陸の心臟部とも云ふべき支那大陸が如何なる思想、如何なる政治的機構のものであるかといふことを簡單にお話し申上げたのであります。三民主義をその信條とする國民黨政權の存する限り、支那の將來は絶望です。三民主義的思想動向が遂に日支の間に先月上旬以來見るが如き事態を惹起するに至つたのであります。即ち私共は皇軍を先頭として三民主義を奉ずる支那の政府と軍部と黨部といふものと對立抗爭しつゝあるのであります。三民主義的支那の全土は、これを放任する時崩壊の一路あるのみ。日支兩國の全面的衝突はこれを免れることは出来ない。その結果は先程申しましたように國民黨政權の壊滅といふことであります。國民黨政權の壊滅せる後の支那を如何に修理固成すべきであるか、如何なる原理の下に吾々は支那の再建に努力すべきであるか、恰度獨逸の民族社會主義が歐羅巴再建の指導原理であるやうに我が建國の根本體制である皇國々體原理が、嚆して又支那大陸再建の運動を援助する根本思想である事を私は確信して已まないであります。然らば言ふところの皇國の國體原理とは如何なるものであるか。

先程私は獨逸の民族社會主義的指導者國家の基くところは實にゲルマン民族の泣血の叫であるとしたのであります。即ち地を同じくし土地を同じくし、歴史的運命を同じくするゲルマン民族が彌榮に榮へ行かんとする建國の大綱として指導者原理といふものを高く掲げ、この指導者を中心とする一致團結の強烈なる國家といふもの



を作りつゝあるのであります。我が皇國の基礎は申迄もなく神々に依つて産み出されたる大和島根、その大和島根に生え抜ける日本民族、この血縁を同じくし、傳統數千年の歴史的運命を同じくする大和民族が土臺であります。そうしてこの大和民族の無窮の繁榮の原理として私共は永遠に搖ぎ給はぬ、動き給はぬ、變り給はぬ天皇を戴き奉り天皇にまつらふことに依りて打つて一丸の鐵の如き一致團結億兆一心の國家を結成してゐるのです。これ等の點に於て日本の皇國と今日の獨逸指導者國家との間には著しく近似するところがあります。唯一點今日獨逸を以てしても遂に遠く日本に及ばざるところがあるのであります。それは獨逸指導者原理の實施に際し、その最後に於ける破綻です。指導者原理は多數決原理を排撃する。この故に全獨逸指導者たるヒットラーは國務の重責に任ずる人々をその指名に依つてこれを任用し以下これに倣つて居るのであります。然らば誰が全獨逸國家の指導者たる全獨逸指導者を指名するのであるか。全獨逸國家指導者を指名する人は最早ないのであります。この爲に一番大事な全獨逸國家の指導者、今日ヒットラーの占めて居ります地位を占むる人物は、これを國民の推舉に待つと云ふことに成つてゐます。茲に指導者原理は最後に於て一つの破綻矛盾を示して居ります。この點に關聯致しまして今日ヒットラーの後嗣者として屬目されて居りますルドルフ・ヘッスの先生であります。ハウスホーフアーといふ曾て日本にも駐在武官として滞在した事があり、以來日本の研究にその半世を捧げ、今日ミュンヘン大學の教授として令名ある陸軍少將ハウスホーフアー教授が、私の知人に次のやうに洩したのでございます。

吾々獨逸人は近代文明を作り出す技術に於ても、學問に於ても何處の誰にも負けない自信がある。近頃はその

上に國家の秩序に於ても統一に於ても、又民族精神自覺の點に於ても斷然として頭角を抜いて居る積りである。だから吾々は日本に對しても決して獨逸が劣つて居ると思はない。吾々の方が寧ろ先生の積りで居る。併し今日の世界に誇り得る第三國ナチス獨逸に於ても唯一つだけ日本に叶はぬものがある。それは日本の國體だ。三千年に近く、上に萬世一系の皇統を有し、國民がそれを基礎として君民一體國威を中外に闡明せんとするその恐るべき傳統と歴史に至つては獨逸がどんなに自慢してもこれだけは出来ない。恐らくは今後三千年掛つてもこれだけは作り出し得ないであらうと。これが自國獨逸を知り、又日本を知るハウスホーフアーの述懐なんです。この言葉に依りまして我が皇國の國體の原理が將來の世界建設の運動に對して如何なる重要な意義を有つて居るかといふことが略お分りになるであらうと思ふのであります。獨逸今日の所謂民族社會主義は單なる理論構成に非ずしてゲルマン民族の血と地よりの叫であると思つたのであります。同じく皇國の原理は單なる架空の理論に非ずして事實そのもの、聲である。本居宣長先生はその晩年にうひ山踏といふ書物を書いて皇學入門ともいふべき教を述べて居られるのであります。その中に日本の皇國の道は支那の所謂道と異なつて單なる理論に非らず、寧ろ事實にある事蹟にあると言つて居られるのであります。然らばこの皇國の事蹟は何處に存するのであるか本居宣長先生は研究の便宜からして、これを神代及上代の事蹟に限定されるのであります。即ち我が國の道は神代及上代の事蹟の上に備はつて居るのである、従つて神代及上代の事蹟を探ることが深ければ自ら我が國の道明らかであると斯う説いて居られるのであります。けれどもこれは研究方法の便宜としてはさもあるべきことで



ありますけれども、今日と致しましては皇道事蹟の顯著なるもの決して神代及上代に留まらないのであります。如何にも日本歴史三千年必ずしも常に皇道の事蹟昭々として顯著なるものあつたと言ひ難いのであります。藤田東湖の正氣の歌の中にも「時として汚隆なきにしも非ず」と云つて居るのであります。卒直に申しますれば三千年の日本歴史に於きまして皇道の顯著なる事態は寧ろ尠かつたと言つても過言ではないのであります。而も尙、藤田東湖が言つて居る通り「時として汚隆なきにしも非ず、正氣時に光を放つ」と。黒雲白雨國體の輝きを蔽ひ去る事實に一再ではなかつたのであります。常に又再び光を放つに至つて居るのであります。然らば、我が國體の原理が最も強くその光を放つたのは如何なる時代であつたか。今暫く現代を措いて過去を顧みます時に、私共に直ぐさま皇道の昭々として國民的自覺の内容を形作つて居りました時代として幕末明治維新前後を上げることが出来るのであります。藤田東湖の如きはあの回天詩史の中に「苟くも人心を正し、大義を明かにすれば、皇道奚んぞ興起せざるを患ひん」と言つて居るのであります。即ち皇道の興起せざるを患ひないといふことが既に維新運動の初期にみまかりました藤田東湖の意識の上にも、明かに現はれて居るのであります。吉田松蔭に至りましては一層明かであります。そこで明治維新の以前はあの有名な明治維新の大號令の喚發されました當時、その國民精神は實にこの皇道の開明といふことが出来るのであります。然らば明治維新の精神的内容はなんであつたかと云へば、言ふ迄もなく尊王攘夷といふこの四文字二格言を以て盡くすことが出来ると思ひます。御承知の通り明治維新の達成と同時に攘夷は何時とはなしに開國と變り、いつしか攘夷家と言へば頑冥固陋家と同じ意味を帯ぶるに至り、次いで今日に及んだのであります。幕末明治維新當時唱へられた攘夷といふことは、果して

さういふ頑冥固陋な鎖國思想であつたかといふと斷じてさうではなかつたといふことを私共は今日之を知ることが出来る。幕末維新の志士が、維新の經典として常に肌身を離さなかつたものに、水戸の碩學會澤伯先生の新論といふ書物がござります。吉田松蔭の如きは僅か三十に満たざる短生涯の間にこの會澤先生の新論を繰返し讀むこと日記に記して居るだけでも六回に及んで居ります。それ程迄にこの新論といふ書物は、明治維新先覺者の思想を鍛鍊陶冶するところ大なるものがあつたのであります。申迄もなく長州の勤王は吉田松蔭その備をなし居る。薩摩の勤王は大久保、西郷の先輩でありました有馬新七先生がその備をなし、又その魂であつた。その有馬新七の如きは等しくこの相澤伯民先生の新論に傾倒して殆んどその一言一句これを暗記して居つた形跡が彼の文章の上に残つてゐるのであります。長州、薩州は水戸と相並びまして、否な實行と云ふ點に於きましては造かに水戸を凌駕して、明治維新回天の大業をなし遂げた勢力であります。その長州と薩摩の勤王の魁は吉田松蔭であり、有馬新七である。その吉田松蔭、有馬新七の維新の思想信念を作つたものは、この水戸の會澤伯民の新論であつたのであります。然らばその新論の精神は何處にあつたか。無論尊王攘夷です。然らばその尊王攘夷といふのは一體どういふ意味のものであるか。唯頑迷固陋に日本國を閉ざして、他の國の人々と交際しない、外國人を排斥するといふことに止まつて居つたかといふと、全然さうではない。寧ろその反對を意味して居る。會澤伯民は後年その新論に附録を加へて蛇足論と名付け、その蛇足論の卷末に新論一篇の精神を歌ふた和歌を詠んで居ります。その和歌は「ことさやく四方のえみしを押し並めて皇國手振りになさんとぞ思ふ」と云ふのです。即ち皇道世界宣布の大精神大氣魄がこの一首の中に實によく現はれて居るのであります。世界を擧げて皇國手振り



にすると云ふことが、即ち尊王攘夷の眞精神であつたのです。然らば斯の如き高邁な尊王攘夷の精神は、幕末先覺の士これを何處より汲み來つたものでありませうか。私共はあの明治維新の大號令の喚發されるに際し、岩倉公がその内容に付て玉松操先生に諮問することあつたことを知つて居るのです。當時岩倉公を初め明治維新の元勳は、明治維新を建武中興の繼續と考へて居られたのであります。然るに玉松操は、その非なる所以を指摘して、明治維新の宏謨は宜しく之を神武創業にならふべきである。神武創業こそ明治維新の模範たるべきものであるといふことを主張致したのであります。その爲に、私共はあの明治維新の大號令の中に、神武の創業に則りてといふ詔を拜讀することが出来るのであります。この事實に依りましても明かでありますように、幕末維新の先覺者は事實上、建武中興の事蹟に感奮興起せるものであります。元々明治維新の一つの思想的源泉をなして居ります水戸學といふものは、實は楠公崇拜にその端緒を有つて居るのであります。御承知の通り水戸學の創始者は水戸光圀である。水戸光圀公は初めて、湊川の荒れた草深い土地を拓いて噓忠臣楠子之墓といふ墓碑を建て、楠公の遺跡をお慰びになつた方であります。斯ういふように明治維新を鼓吹せるものは實に建武中興の事蹟でありました。それならば建武中興の精神は何處にあつたのであるか。建武中興の志すところは奈邊にあつたかと申しますれば、當時の我が國の政狀は申迄もなく北條幕府の政治であつたんです。天皇は所謂虚器を有し給ふに過ぎざるが如き悲しき有様にあつたのであります。後醍醐天皇深くこれをお歎き遊ばされ、寛平延喜の古に還へすの御志切なるものおはしたのであります。歴史家の研究に依りますと、後醍醐天皇と申上げます御謚號は、天皇御在世中既に御決定遊ばされて居つたといふことであります。といふことは即ち後醍醐天皇は自ら醍醐天皇の御

跡をお慕ひ遊ばさるゝその御志をその御謚號の上に御現はし遊ばされて居るのであります。然るに醍醐天皇と申上げますれば言ふ迄もなく所謂延喜の帝延喜の帝と申上げますれば、寛平の宇多天皇をお繼ぎ遊ばしまして、院政を退け攝政を止めて天皇御親政の政治を贊はし給へる天皇でございます。換言致しますれば後醍醐天皇の御志の存せるところは、天皇御親政にあつたのです。天皇御親政とはこれを國民の側から申しますれば、天皇に私共の唯一絶對無二の動かぬ生命の中心は仰ぎ奉るといふことに外ならない。天皇を中心に仰ぎ奉り、その後威の下に活き且つ働き且つ闘ひ行いて一致團結の國家を結成するといふ事が、即ち天皇御親政の意義でございます。然らばこの後醍醐天皇のお慕ひ遊ばされた寛平延喜の政治といふものは抑々何時頃初めてその實現を見ることになつたかといふと、それは大化の改新であつたのです。大化の改新に先立つ有様として吾々の見るところは、豪族の跋扈であります。蘇我一門の如き、皇室を凌ぎ奉るが如き惡逆不逞の振舞の數々を盡して居るのである。これを御覽せられて、中大兄皇子は天に二日なし、國に二王なし、日本に君たるべき者は唯だ天孫の裔たる者のみである。然るに今日蘇我氏一門が皇室を凌がんとしつゝあるは、許すべからざることである。この御決意御信念の下に中臣鎌子と謀つて遂に、蘇我入鹿を御誅し遊ばされるのであります。即ち尊皇の大義が大化の改新の行動原理であつたのです。然らばこの天に二日なし國に二王なし、日本に君たるべきものは天孫の裔でなければならぬと云ふ事の、確實に事實の上に確定したのは何時であるかと云へばそれは神武創業であつたのです。然らば神武の創業は、どういふ精神の下に爲されたものであるか。古事記は私共にその御精神の存するところを次のような言葉で以つて簡潔に叙して居るのであります。「荒ぶる神等を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平けたまひて、敵火



の白檮原の宮にましまして、天の下治しめしき」と。これが神武御即位の御精神であり、建國の大精神であります。荒ぶる神等を言向けやはし、とは、即ち天皇に順ひ奉らず、騒擾を事とするやうな豪族を言葉に向けてこれを和らぐ鎮め、伏はぬ人どもを掃ひ平げるとは、悪逆の徒は之を武力を以てしても掃平してまつらう者たらしめると云ふのです。即ち神武創業の志の存せるところは、實に天皇を中心と仰ぎ奉る、まつろひの一大組織を結成するといふことにあつたのであります。而してその手段として一面思想戦、他面武力戦を敢行したのである。言向けやはすとは、即ち順逆の理を説き聞かせる。教を説くといふことである。教を以つても尙伏はざる者あれば己を得ず武力を以つて之を掃ひ平らげるのである。武力を以てするもしかもこれを掃つてこれを滅すのではなく寧ろこれを平らかならしめる。即ち伏はしむるのであります。これ實に我が皇國の本義であります。なにが故にこの建國の精神は、之を正しき精神であると言ひ得るか。曩に申しましたように人の人たる面目は決して人各々自らを中心として在るところにあるのではないのです。

若し私共人間にして神の如く自ら／＼を産み、自らを哺み育て、自らを教へ導く者であるならば、吾々は自らを中心とし、自らを旨とし、自己に依つて生活行動することが出来るものであり、それが又當然の道です。然るに人間なるものはさうではないのです。他より生れて他に依つて在り又榮えつゝあるものです。従つて人間として活き且つ榮え行く所以の道は報本反始、換言すればその生命の源に伏らうといふことでもあります。之を私共は又敬神崇祖と言つてゐるのであります。人間の本當に據るべき道は實にまつらひにあるのです。その道を古事記は神武創業の御精神に因んで、荒ぶる神等を言向けやはしまつろひはぬ人どもを掃ひ平らげ」と説いたのであります。而

してこの神武創業は言ふ迄もなく、その理想を天照大御神の御神勅に仰ぎ給ふて在はします。その故に神武天皇は建國と同時に大和の鳥見山に靈時を御築き遊ばされ、日本書紀の言葉を以て申しますれば「大孝を申べたまふ」てお居でになるのであります。即ち天照大御神に感恩感謝の誠を御捧げ遊ばされて居るのであります。私共臣民は天皇に伏ろひ奉り、天皇は天照大御神にまつろひ遊ばし給ひ、斯くして茲に一大まつろひの團結は、結成されるのであります。これが即ち人間の誠の姿であるのであります。以上申述べました皇國の姿の最も顯著に現はれて居りまする明治維新、建武中興、大化の改新、神武創業、この日本國史の上に最も顯著なる時期を、改めて検討致します時に、その文化内容に至りては、時代を異にするに従つて常に異なつて居るのであります。その根本的精神機構に至りましては、神武創業の昔より明治維新否な今日の昭和維新の現代に至る迄一貫して軌を一にして居るのであります。それは即ち明治維新の口號がよく之を現はして居るやうに、尊皇攘夷といふことでもあります。これを古事記の言葉を以て言へば、荒ぶる神等を言向けやはし伏はぬ人どもを掃ひ平らげると言ふことが即ち尊皇攘夷といふことでもあります。而してこのまつろひやはらぎを實現する手段方法として私共は飽く迄も思想戦武力戦に依つて行かなければならぬ。即ち伏ろはざる心、従はざる心、逆らふ心、邪なる心、これ即ち夷心であります。この夷心を掃つて行くことが即ち攘夷といふことなんです。今日の言葉に翻譯しますれば、自己を主とする自由主義的根性を打倒することが即ち尊皇攘夷の精神に外ならないのです。このことは會澤伯民も繰返し／＼し言つて居るところでございます。彼は尊皇攘夷を高調力説して斯ういふ風に言つて居ります。

「夫太陽餘光之所被、則仁人博愛之所暨、雖四海萬國、亦莫非人類、而妖教之滋蔓、禁亂天倫泯滅人紀、使元元



農惡沈溺、相率爲禽獸、爲鬼蜮、豈仁人之所忍視哉、故覆幘無外、以夏變夷、使天人免於胡羯蹂躪者、同仁人之志、而揆文奮武光被四表、以觀秋光揚大烈者、仁人之業也、持其志而廣其業、務在於明國體、循大下一今古、博廣悠久、以照監夏夷、循細戈之名而實之、所以足兵也、循瑞穗之名、而實之、所以足食也、明忠孝以淬礪天下、所以使民信之也、三者並舉、食足、兵足、民信之、忠孝以明、天人合一、幽明無憾、以正易說、以夏變夷、萬世而不已者、不拔之業也」

と、これが即ち本當の尊皇攘夷の意味内容を正しく現はしたもののなのです。扱て既述の皇國の歴史的事實を分折し、その機構を尋ねて見ますと、そこには一貫せるものがあります。これが概念的把握が即ち皇國の理論を構成するのであります。皇國國體の理論はマルクス共產主義の如き猶太精神の爲めにするところあつて作爲せる理論に非ずして、實に嚴乎たる歴史的事實そのものの構成原理たる所のものであります。爰には先づ皇國の倫理より論じようと思ひます。先づ皇國のなんたるかは皇國といふこの美しい純粹の日本の言葉が實は最もよく私共にその内容を語つて居るのです。皇國とは言ふ迅もなく天皇のしろしめす國といふことである。天皇と云ふ言葉は二つの日本語から成立して居ります。一つは「すめら」と云ふ言葉であり。一つは「みこと」といふ言葉であります。「みこと」といふ言葉は貴い御方といふほどの意味であります。私共は今日尙ほ折に觸れて自分のことを私事、中世の頃迄は話相手のことを御事と云ひましたが、その言葉遣ひにも現はれて居りますように、日本語に於きましては人の人たる所以のものを事をいふ言葉を以て現はして居るのです。今日の言葉で言ひますれば人格といふ程のものを事といふ言葉を以つて現はして居る。その「こと」に敬稱である「み」を付けますと「みこと」といふ言葉が出来ます。即ち「みこと」とは、貴き御方と云ふ意味であります。さういふところから私共は總て貴き人々又神々をなに／＼の「みこと」と申し傳えて居るのであります。然らば「すめら」とは如何なる意味の言葉であるか。私共は古の言葉遣に依りまして、「すめら」と「すべら」と同一意味の言葉である事を知つて居る。而してこの「すべら」といふ言葉は明かに「すべて」といふ言葉から出て居る。それならば「すべて」とはどういふ意味であるか。「すべて」とは多くのものから成立つて居りながら、而もその結果に於ては打つて一丸の鐵の如き纏まつた一つのものである場合、これを指してすべてといふのです。例へば茲にお集まりの方はすべてと斯う申します時には、茲にお集まりの方は一人も残らず、恰も一人の如くといふ意味を有つて居るのであります。従つてすべら即ちすべてとするといふことは、多くのものを打つて一丸の鐵の如き全一なるものとするといふことでもあります。従つて天皇とは多くのものを打つて一丸の鐵の如き全きものと遊ばず貴き御方といふ意味であります。従つて天皇の治しめす皇國とは、億兆もの多くの臣民から成立つて居りながら恰も打つて一丸の鐵の如き一つ的全き國と言ふ事であります。皇國とは今日の言葉を以つて申しますれば、一致團結一結束國家、全體國家といふ意味なんです。この皇國といふ言葉を深く反省して自ら到達致しまする結論が聽て又國體の精華の何たるかをお示しになつて居ります教育勅語の御旨の存するところに外ならないのであります。教育勅語は私共に國體の精華が一應二つの要素から成立つて居ることを語つて居るのであります。即ち「朕惟フニ我皇祖皇宗國ヲ肇ルコト安遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と云ふ御言葉の指し示す所のものが我國體の精華を構成する根本要素であることは言ふ迄もございませぬ。國を肇むること安遠に徳を樹つること深厚にまします皇祖皇宗



即ち代々繼々の永遠へなる天皇。この永遠に變りなく動きなき天皇、この天皇が國體の精華の最も重要な構成要素に在しますといふことは言ふ迄もないのであります。それならば國體の精華はこの萬世一系の天皇を戴き奉つてゐることに盡るのであるが、これを以て全たいのであるかと申しますれば、教育勅語は否と答えて居ります。如何に私共が萬世一系の皇室を九重の雲の上に戴き奉つても、若し私共にして克く不忠に克く不孝に億兆心を二三にして世々厥の惡をなし、所謂政黨政治華なりし當時の如く恬として自ら省る所無かつたならば、國體の精華は之を以て擧がるとは言ひ得ないので。國體の精華の發揮されます爲には、國民は、一定の生活態度に出なければならぬ。自由主義的に己を擅にし、己を旨とし勝手氣儘に活きる限り、國體の精華は寧ろ滅却さるゝものと見なければならぬ。然らば如何なる生活態度を私共臣民の側に於て、實踐窮行することに依つて、初めて國體の精華は擧がるのであるが。それは即ち我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟すと云ふ事でありませぬ。かくしてこれが即ち國體の精華を構成する第二の要素であります。而して此の臣民の一定の生活態度に於てその眼目の存するところは、私の見るところを以て致しますれば、實に億兆心を一にする、といふところにあります。然るに億兆心を一にするといふことは、これを眞面目に考へて見ますと、實に容易ならぬことでもあります。私共の生活に於ては、一家の和合すら、往々破れ勝であります。一村一町若くは一校、一會社、一工場<sup>一</sup>の心を一つにするといふことは必ずしも容易の業ではない。然るに茲には億兆の一心が要請されて居るのであります。ちよつと考へて見ますと殆んどこれは不可能のことと考へられるのです。而も翻つて深く考へて見ますと、一つの條件が充たされれば、この億兆一心といふことも期せずして實現されるのです。それはなんで

あるかと申しますと、私共の公、即ち政治的生活の中心が唯一絶體無二であり、更に進んで私共各個人各々の最高最後に祈願するところのものが同じものであり、更に私共銘々<sup>々</sup>がその心の奥底深く念願するところのものが、總て又私共の公の生活の唯一絶對無二の中心とする所と一致したその時に私共は自ら期せずして一つ心になることが出来るのであります。私共の社會的身分や職業や志望や傾向がどんなに變つて居りましても、若し曩に述べました條件が充たされますれば私共は私共の生涯の最後の最も大事なところに於て期せずして一つ心であるのです。然らば果して斯の如き公私二つながらの生活を貫く絶體唯一無二の生命の中心が、吾々の間に存して居るであらうか。なんの幸ぞや吾々日本國民の間には、而して獨り吾々日本國民の間に於てのみ、斯の如き公私二つながらの生活を貫く唯一無二の中心があるのです。それが即ち前に國體の精華を構成する第一の要素であると申しました永遠の天皇であります。即ち私共が天皇を私共公私二つながらの生活の絶體唯一無二の中心と仰ぎ奉る時、その時私共は自ら一つならざらんと欲してもならざるを得ないので。而して天皇を私共の公の即ち政治的生活の中心と仰ぎ奉ることを我國に於ては忠と言つて居るので。忠とは讀んで字の通り、中心に仰ぎ奉るといふことなんです。即ち大君に伏ひ奉るといふことを私共は忠と言つて居る。然るに我が國體はこれを社會學的な見地から見ますと、國は即ち家である。今上天皇の御即位式勅語の中にも「我が皇祖皇宗國ヲ樹テ民ニ臨ムヤ、國ヲ以テ家トナシ民ヲ見ルコト子ノ如シ」と仰せられております。この「國を樹て民に臨むや國を以て家となし」、この御言葉が、最もよく日本國家の社會學的起源を指摘せるものであります。このことは私共が銘々の家系、それに繋がりまして銘々の姓名の起源を反省致しましても自ら明かなこととてございませぬ。言ふ迄もなく私共



の今日負ふて居ります姓名は何れもこれは近代發生のもので、少しく廻りますれば何れは源平その他の僅かの姓に還えされる。而してこれ等の僅かの姓はその大部分は直ぐ様皇室に還元して行くのです。又新撰姓氏錄等に神別と申して居りますものは、天孫降臨以前より天孫を輔弼し奉つた家々のことを言つて居る。中臣の如きはそのよい例であります。今日の近衛總理大臣は即ち藤原の嫡流で藤原の家は元々中臣と稱へて居つた。中臣は神代に既に天孫の輔弼に任じて居られた。私共の考へるところに依りますれば中臣の家と雖ども尙ほ廻れば皇室に基くと思ふ。斯ういふように日本の凡ての家は何れも、實は皇室にその源を發して居ります。さういふところから私共は今日尙ほ皇室のことを大内と申上げて居る。大内といふことは言ふ迄もなく、私共の銘々の小さい小家に對する大内であります。斯く見て参りますと、日本國家は皇室の發展擴大強化せるものである。茲に日本國家の獨特の姿があります。さればこそ世界に國をなすもの多しと雖も、唯吾々日本民族のみが、國家といふ文字を以つて國家を現はして居るのであります。如何にも國家といふ此の二つの文字は支那の字でありますけれども、私の知る限りに於ては支那に於ては曾てこの國と家といふ二つの字を以て吾々の如く一つのものを指差したことはないのであります。近世三十年以來は支那人が此の熟語を日本から支那に輸入して、今日では私共と同じように高度の組織的權力團體のことを國家と言つて居りますけれども、昔はさうでない。例へば天下國家と申します時には彼等の意味するところは天が一つ國が一つ家が一つこの三つを指して居たのです。字引をお開きになりましても國と家とは各別なものとして説明されてゐます。例へば諸侯是謂國、太夫是謂家、と云ふが如き類であります。ところが日本に於ては元々國家なるものは、家の發展擴大強化せるものであります。國は即ち家であります。

さういふところから初めから國家といふ二つの字を使ひまして、一つのものを指差して居る。私の知る限りでは初めて國家といふ字が日本の文獻に現はれて参りますのは日本書紀景行天皇紀五十一年の記事でございます。當時日本武尊の奥羽御平定の後未だ程經ぬことであつた。日本武尊の東北御遠征の結果として多くの夷即ちアイヌを近畿地方に虜としてお連れ歸り遊ばされ、それが近畿地方に駐屯して居つたのであります。彼等は未だ十分皇化に潤ふてゐないが爲に時々亂暴狼藉の振舞もあつたらしくあります。景行天皇五十一年の正月宮中に於て新年の御宴が行はれます。群卿百寮何れも晴やかに参内しますのに、後成務天皇として天津日嗣を御綱遊ばしました稚足彦尊及び武内宿禰の姿が見えませぬ。景行天皇は訝かしく思召してその故をお尋ね遊ばしますと、皇子は、武内宿禰と共に兵を率ゐて宮闕の警備に任じて居られた。そして奏上遊ばす御言葉に、「其の宴樂の日は群卿百寮必ず情を戲遊に在きて國家に存かず。若し狂生有りて墻閣の隙を伺はむか。故に門下に侍ひて非常に備ふ」とあります。爰に始めて「國家」といふ言葉が出て参ります。皆が酒宴に夢中になつてその心國家にないそれで何時狂人が、この狂人らは恐らくアイヌを指したと思ひますが、何時狂へる者が宮廷に仇せんとも限りませぬから、兵を率ゐて警備に任じて居りましたと申上げられたのであります。爰に「國家」といふ字をどういふ風に讀んだかと申しますと「みかど」と讀ませてあります。即ち國家は即ち皇室であつたのです。その皇室が、段々擴大してこの大なる機構組織權力を持つに至つたのが日本國家であります。これ即ち今上天皇の御即位式勅語の中に「國を以て家となし」といふ御言葉がある所以であります。さういふ譯でありますから日本の國家はこれをその成立發達の跡に付て申しますれば、實に家族國家なんです。さればこそ私共は國家のことを國家といふ



字を以つて現はします。これは私共日本民族許りです。昔の西洋の人は國家をなんと云つて居たか、古の希臘の人は Polis 羅馬の人は Civitas と言つた。何故であるか。ポリス或はチビタースは何れも元々町と云ふ言葉です。彼等の國家は町の發展擴大したものであつたから之を依然町と云ふたのです。近世西洋の人々は吾々が國家と呼ぶものをなんと云つて居るかと言へば Status Sanct 等と言つてゐます。即ち羅馬語の Status です。而してその意味は、「立つて居るもの」と云ふ事です。鐵道の驛のことを英語ではステーション、獨逸語のステーションと言ひます。これは無論スタートスといふ言葉から來て居る。即ち汽車の立場といふ意味です。Status は、立つて居るものといふ事です。それならば何が立つて居るのであるかと申しますれば、狀態が立つて居る。即ち現に立つて居る。現に行はれて居る約束、約束に基く狀態といふ意味なんです。どうして吾々日本人が、國家といふ言葉を以つて現はすところのものを、近世西洋の人は現行協定といふやうな妙な言葉を以て現はすのであるかと云へば、これは曩に申しましたように近世西洋の國家は何れも中世末期近世初頭に於ける武士階級、僧侶階級及び町人階級、この三階級の利害の協定が土臺となつて出來上つたものである。さういふところから國家のことをその起源に即して status と言ふたのであります。この言葉にも實によくその國家の成立が見えて居るのであります。我が日本の國家は反之、家の發展擴大強化せるものです。従つて我が國の大君は、家族といふ側から見ますると、大御親にましますのです。天皇は私共に取りて、表向きには大君、裏向きには大御親にまします。而して私共は表裏共に天皇に唯一絶體無二の中心を仰ぎ奉るものであります。即ち臣として大君に忠勤を擧んじて克く忠であり、子として親に誠を致して克く孝であるのです。故に勅語に克く忠に克く孝にと仰せられてゐる時の孝は

私共の肉親に對する孝を言つて居るのではない。大御親としての天皇に對するの孝を言つて居るのであります。大君としても又大御親としても、私共が天皇に私共の生命の絶對唯一無二の中心を仰ぎ奉るといふことを克く忠に克く孝にとは言つたのであります。さればこそ又、私共は億兆心を一つにすることが出来るのです。而して此の億兆一心の協力から凡ての大なる偉業が生れて、世々厥の美を濟す事が出来る。反之分離鬭争の存するところの結果は破壊であり、従つて衰亡であります。斯く考えて参りますと、我が國の國體は、一應はこれを二つの要素に分ることが出来るのであります。深く考へて見ますと、億兆心を一にするといふことは、忠と孝との永遠不拔の目標たる天皇のましまして初めて出来ることであり、結局二にして二ならず又一つに歸する次第であります。更に一步を進めてこの億兆一心を實現する所以の原理たる天皇の御本質は、日本國民の大君にましまして大御親にまします事を以つて盡きるかといふと、尙ほ盡きざるものがあるのであります。天皇が單に私共の大君にましまして大御親にましますだけではありませんならば、私共は必ずしも私共の公私二つながらの生命の最後、最高絶對の念願を投げかけ奉ることは出來ないといふ議論が起り得るのであります。然るに私共はキリスト教徒がその絶對唯一無限の神に崇敬を捧げ、或は佛教徒が釋迦如來、大日如來、阿彌陀佛等にその最後の念願を投げかけると同じように否、それ以上に、深刻に、熱烈に、具體的に、私共の總ての生命、總てのものを天皇に捧げ奉りて敢て悔ひざるのみならず、寧ろその事に無限の喜びを感じる所以のものは、私共が天皇に大御親を拜し奉る許りでなく、その上に天皇に明御神あきみのかみを仰ぎ奉つて居るからであります。實際又今日こそ天皇の公式の御稱號に明御神といふ言葉はお使ひ遊ばされないのでございますが、古の公文書にはその國內的のものたるとその國



外的のものたるを問はず、常に天皇を明御神と申上げて居りました。茲に書出しましたのが、その一つの例です。即ち大化の改新、當時國內に對する天皇の公式の御稱號は、明御神宇大八洲天皇と申上げ、海外に對する外交文書には明御神宇日本天皇と御誌るし遊ばされて居るのであります。即ち何れの場合にも、内外を問はず「明御神」これが即ち天皇の御本質の端的なる表現であるのです。私共は斯くして天皇に唯大君、大御親を仰ぎ奉るばかりでなく實にその上に明御神を拜み、齎き奉るものであります。そこに本當の日本人としての天皇に對する忠孝一致の態度があるのであります。それならば天皇に明御神を拜み奉るといふことはどういふ意味のことであるか。歴史的にこれを説明致しますれば、天皇に明御神を仰ぎ奉るといふことは取も直さず、天皇に天津日嗣を拜し奉るといふことに外ならないのです。その故に私共は天津日嗣の天皇と申し上げるのであります。それならば天津日嗣とはどういふことであるか。申迄もなく天照大御神を御嗣ぎ遊ばす御方といふ意味であります。換言致しますれば、天皇を天津日嗣と申上げますことは、天皇に天照大御神の御姿をさながらに拜し奉るといふことに外ならぬ。然らば天照大御神を拜み奉るといふことはどういふ意味でありますか。之に答ふる爲には、私は更に進みて天照大御神の意義を少しく説く必要がある。御承知の通り天照大御神は伊弉諾尊の最も愛し給へる貴子にましました。換言致しますれば天照大御神は伊弉諾尊の御偉業をお繼ぎ遊ばした御方にまします。それならば伊弉諾尊の御勳は何處にあつたのであるか。日本民族の信仰に依りますと、この日本國家の構成要素であります日本國土即ち大八洲及びその大八洲に住むところの國民日本民族、その日本民族の依つて以て生存を續け得る所のもの、即ち凡ゆるものは悉く伊弉諾尊の作り給えるところのものである。伊弉諾尊こそこの大八洲を生み

給へる神にましました、又あの黄泉比良坂に於ける伊弉諾尊の絶妻の誓の詞の中によく現はれて居りますように、伊弉諾尊の御念願に依つて初めて日本民族は、その永遠無窮の存續發展の保障を得てゐるのであります。而してこの國土、國民をお生み遊ばされた伊弉諾尊の最も愛し給へる貴子として天照大御神はお生誕遊ばされたのです。而もこの國土國民の大君としてお生れ遊ばされてゐる。これを近世西洋流の國家學の立場から見ましても、國家構成の三要素たる國土と國民と主權者の三者は伊弉諾尊に依りまして生み出されて居るのであります。而してこの日本國家の中心、その肝腎要とも申し奉るべきものは初めから天照大御神にましますのである。従つて天照大御神に對する信仰は取りも直さず最も日本的な國家に對する信仰に外ならないのであります。然るにこの最も日本的な國家の創建たるや、少くとも古事記の傳ふるところに依りますと、伊弉諾尊の擅なる御意思に基くものでなく、寧ろ天津神の御神慮に出でたものであります。古事記は此の事を「天つ神諸の命を以ちて、伊弉那岐命伊弉那美命二柱の神に、この漂へる國をつくり固め成せと詔りてちて、天の沼矛を賜ひて、ことよさしたまひき」と誌してゐます。然らば爰に謂ふ天津神とは如何なる神にましますか。これを古事記に付て見ますれば、爰に所謂天津神とは、主として天之御中主神と産靈神とを指したものであります。而してこの天之御中主神及び産靈神の信仰こそ純粹な透徹して最も日本的な世界人生觀が吐露されて居ります。此の純日本の世界人生觀は寸毫の迷信的分子をも加へて居りませぬ。日本民族は初めからこの時間空間の制約の下にある此の現實の白日の光の下に照されて居る世界を唯一の眞の世界と見てゐるのであります。この世界の背後、常任の世界に眞如の月を眺めようといふが如き戯けた心は持つて居らないのです。この現實の世界が即ち本當の世界なのである。佛教に於



きましては、日本の大乘佛教に至つて初めてほんとうに此の日本の世界人生觀に到達する事ができて穢土即淨土と云ふ信念に徹するので。この佛教にありては千數百年の歴史的發展を通して初めて到達せるこの純粹無碍な、それこそ自由な世界人生觀こそ初めから日本民族の曇りなき眼に映つて居る世界人生觀であつたのです。現實の世界は、常に移ろひ行くものであり、一面確かに儚なき無常なるものでありますが、他面此の世界には嚴乎たる秩序があるのです。その全中には總てを治しめす天之御中主神が君臨し統制し給ふのであります。従つてそれは秩序嚴然の世界です。一面無常であつて儚いけれども、他面嚴乎たる秩序の存して居る世界であります。

秩序の存して居る世界でありますから、此の世界に於ける吾々の一舉一動は悉く苟くもすべきものでない深重なる意味を帯びます。それならばなにを目的として吾々はその日の生涯を生くべきものであるか。それに答ふるのが産靈神の尊信である。八百萬の神々の筆頭の神は實に産靈神であります。産靈神とは産み作り出す力の神と云ふ事である。換言致しますれば今迄なかつたものを新たに有るに至らしめる力の事でもあります。此の生産をこそ日本民族は最も尊んで居るのであります。即ち吾々生存の目的は、實に今迄なかつた有難きものを新たに有るに到らしめて行くことである。今迄なかつた新たな有難きものを常にあらしめる事が私共生存の意義でありますから、日本民族のあるところ、常に新たな有難きものが生み出され、附け加はへられるのです。かくて日に新たに日に進むのです。今上天皇踐祚の勅語に「創造ヲ昂メ日進以テ會通ノ運ニ乗ジ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ」と仰せられてゐますのは、實に此の謂です。日本が日進日新を國是とする所以は、私共が日新日進の根本原因である産靈創造生産を尊びて至高の神と仰ぐからであります。斯の如き深刻な世界人生觀が即ち私共に取

つては神々の御姿として現はれてゐるのであります。この深刻な神々の仰せかしくみ伊弉諾尊はこの日本國家を建設し給ひ、その日本國家の魂として天照大御神をお産み遊ばされたのです。かくして代々次々の天津日嗣に大御親と、大君と明津神を拜み齊き奉り、このまつろひの一致團結の如き組織を結成し、以つて不斷の創造と生産と進歩發展を期する所に吾々日本民族の面目があるのであります。尙ほ色々申上げる積りでありますが時間がありません。これを以てお別れをしなければならぬことを深く恨と思ひます。



昭和十三年二月廿五日印刷  
昭和十三年二月廿八日發行

新更論集分冊

定價金十錢

編輯兼  
發行者 神崎 照惠

千葉縣成田町一番地

印刷者 大友 惟誠

千葉縣印旛郡成田町三三

發兌

千葉縣成田町一番地

新更會刊行部



終

0  
9  
6